

入選

テーマ1..医療と福祉、わたしの体験 「照らしてくれた夢への道」

徳島市立高等学校2年 河野地里子

「ちきこちゃん、おかえり。」

私はこの言葉をかけてもらう度に、「今回の入院や手術も頑張ろう。」と力をもらってきた。そしてその聞きなれた優しい声にほっとした。

私は十六年前、先天性疾患である口唇顎裂という、口唇や歯茎に割れ目がある病気を患って生まれた。この病気を治すため、県外の病院に通い、これまでに八回の手術を繰り返してきた。こんなにも多くの手術を乗り越えられたのは、私の治療に携わってくれるすべての方々が、前向きな言葉をたくさんかけ続けてくれたからだ。その中でも、私が入院する度に医師や看護師の方々がかけてくれた「おかえり」という言葉は、手術への緊張をほぐし、安心させてくれた。いつもあたたかく迎えてくれる病院は、いつからか私にとってセカンドハウスのような場所となっていた。

この十六年間、数多くの治療を行ってきた。手術後、ベッド上のみでの生活を強いられ、思うように体を動かせないとときもあれば、麻酔の副作用が強く、吐き気や倦怠感から食事をとることができないときももあった。その度もどかしさを感じた。しかし、思い返せば私の通院や入院での思い出は、決して痛いことや大変なことばかりではないのだ。病院を受診すると、「休日は何して過ごしたん。」と聞いてくれたり、先生自身の面白い話をしてくれたりした。また、私が小学生のときは、なぜぞろぞろや心理テストによく付き合ってくれた。入院中も毎日何回も病室を訪ね、こまめに病状を気にかけてくれた。数え切れないほどの笑顔溢れる思い出も強く心に刻まれている。

三度目に入院したときのことだった。ある看護師の方が、「私もちきこちゃんと同じ病気やねん。それでこの病院で治してもらっ

たんよ。一緒にがんばろうね。」

と明るく声をかけてくれたことを鮮明に覚えている。同じ治療をした体験をもとに私の気持ちをかみ取り、励ましてくれたことが嬉しかった。入院中は大変お世話になり、とても心強い存在となった。また、その方が自分の病気から得た経験を生かして多くの患者に向き合い、寄り添う姿を見て、気づいたのである。私が様々な治療を通して感じた気持ちも、医療従事者の方々と楽しい思い出も、私にしかない経験で、たくさんの方の支えになれる大きな強みになる、と。それから私は自分の病気をプラスに考えるようになった。そして今度は私が経験を生かして、同じ思いをする人を救いたいという夢もできた。

夢に一步でも近づこうと、私は高大連携事業の一環で、地元の徳島大学とともに口腔に関わる神経についての研究をしている。この夏、日本口腔科学会主催の学術集会に参加し、研究成果を発表する機会を得た。ポスター発表のあとの質疑応答で、聞き馴染みのある声があった。ふと見ると、そこには幼い頃から治療してくれている担当医がいた。私が発表すると聞いたので、忙しい時間の合間を縫って来てくださったのだ。ヒヤヒヤしながらなんとか質問に答え、質疑応答は終わった。終わった後に、先生は「堂々と発表しとったね。びっくりした。」と声をかけながら写真も撮ってくれた。風のように去っていく先生の後ろ姿を見ながら、先生のような患者一人一人を思いやる医師になりたい、早く先生と肩を並べられる医師になりたいと強く思った。

私は今、口腔外科医を目指している。目標は、私と同じ病気を持った子供たちにあたたいセカンドハウスを提供できる医師だ。これからも大変なことは数え切れないほどあるだろう。それでも、今までの経験を生かして目標に向かってひたむきに頑張りたいと思う。そして、今までもらった優しさを還元していきたい。